

出アメリカ、そして21世紀へ： ドン・デリーロの *Mao II* における移動の解釈

江藤 知美

Out of the United States, to the 21st century:
the Interpretation of Characters' Paths in *Mao II* by Don DeLillo

Tomomi ETO

【キーワード】 ドン・デリーロ、現代アメリカ文学、テロリスト、メディア、イメージ、群衆

今年で87歳を迎えるアメリカ人作家ドン・デリーロは、半世紀以上にわたって執筆し、現在も現役で続けている。その中でも、小説家とテロリスト、宗教、そしてメディアを中心に据えた作品 *Mao II* (1989年) は、統一教会による合同結婚式、ベルリンの壁崩壊、天安門事件、レバノン紛争といった社会情勢を小説内に織り交ぜつつ、白黒の写真を各部に掲げ、視覚的なメディアを挿入した前衛的な作品であると言える。前衛的な作品であると断定できるのは、ただ写真を各部に挿入しただけではない。写真には部のタイトルがつけられているのだが、そこには写されている事実とは異なる言葉が当てはめられている。この事実を「ずらし」ことが小説の内容とパラレルになっており、登場人物たちの設定に大きく関わっている。本稿では、こうした「ずらし」に注目しつつ、登場人物たちの実際の動きである「移動」に焦点を当て、それが21世紀にもたらしている言説とは何であるかを指摘する。

1. ヤンキースタジアムと現実の違い

物語の契機は小説家である主人公ビル・グレイ (Bill Gray) が、写真家であるブリタ・ニルソン (Brita Nilson) に自分の肖像写真を撮影依頼することで動き出すという流れで動き始めるが、小説の冒頭は主人公とは関係のない “At Yankee Stadium” (「ヤンキースタジアムにて」) とタイトルのつけられた部から始まっている。この部の表紙には統一教会の合同結婚式を映した写真が使われているが、実際に映っている場所は1982年にマディソン・スクエア・ガーデンで執り行われたものである。(*Mao II* が出版されるまでにアメリカで合同結婚式が行われたのは、82年のマディソン・スクエア・ガーデンだけであり、97年ロバート・F・ケネディ・メモリアル・スタジアム、98年マディソン・スクエア・ガーデンは出版後であることから、そのように断定づけた。) 仮に、この写真がアメリカで映されたものでさえなかったとしても、我々読者はその部のタイトルを疑うこ

となく受け入れるだろう。こうした実際の出来事とイメージを使った意図的なメディア操作は、ヤンキースタジアムというアメリカ文化の象徴と異文化からの宗教儀式的不気味さや異質さをより強調し、この小説のテーマの一つである「群衆」のおぞましさを前面に押し出すことに成功していると言える。加えて、合同結婚式に臨むカレンが“*This is where the Yankees play.*” (8) と語り掛ける一方で、彼女の夫は英語が分からず理解ができないといった態度で二人は噛み合わない。このように不穏さを前面に押し出しながら、作者デリーロは冒頭の画像に細工をすることで、我々読者を揺さぶりかけているのではないだろうか。こうした画像とキャプションを使って受け手を大きく動揺させることが現在の SNS で横行していることを考えると、メディアの信憑性だけが問題ではなく我々受け手が真実に対して鈍感であり、疑念を差し挟まない存在であるかを露呈させている。いみじくもカレンは「未来のウイルス (“the virus of the future”）」(119) を運んできたビルに言われることを鑑みると、彼女の存在は二十一世紀を揺さぶるメディアのような立ち位置であると言えるだろう。この部の写真挿入が意味するのは二十一世紀におけるメディアの存在であり、それに対する我々の脆さの揶揄ともいえるのではないだろうか。

ヤンキースタジアムを起点としてカレンは信者とともにバンでアメリカ各地を渡り歩いていくが、彼女の信仰生活はグループごとに分けられたバンに乗り込み睡眠や食欲といった生理的欲望を極限まで制限して教団のために花を売り奉仕していく様子が描かれている。そういった中で宗教活動を反対していたカレンの家族たちから奪還されるという危機に見舞われ、どうにかこうにか家族からの逃亡を図るのだが、その際にカンザス州のノースイーストに位置するホワイト・クラウド (*Mao II* 83) という町でスコットと出会うことになる。

2. カレンとブリタ：移動からみるビル思想への没入と奪還

スコットと出会ってからは、アイオワ州、イリノイ州を抜け、主人公ビルが住む隠れ家にたどり着く。スコットとカレンの出会いから主人公の住処、そしてその後ニューヨークで活動した後に再び主人公の住処へ戻ってくるおおまかな経路が図1に示した通りである。ここで注目したいの

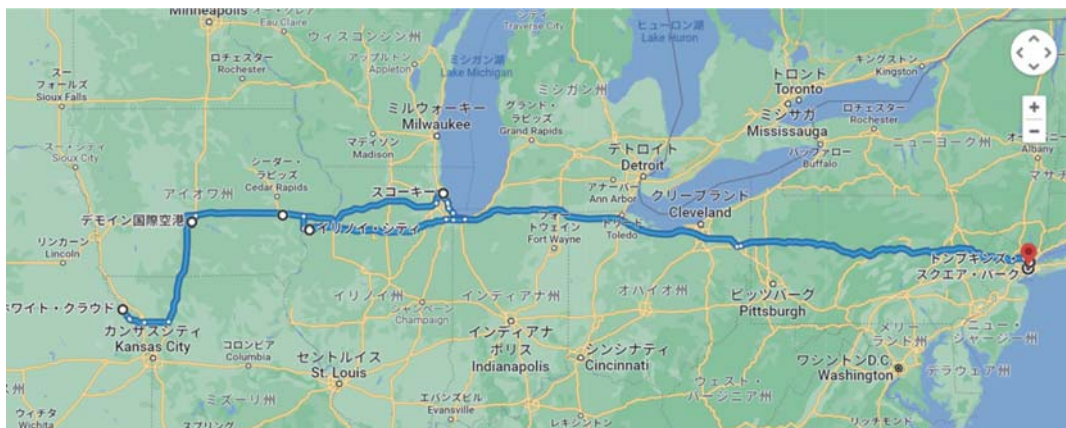


図1 カレンの経路

は、このカレンとスコットの逃避行がスコットの回想という形で語られているという点である。そしてその語られる状況がスコットがブリタをニューヨークへ送る際に語られているという移動を中心に据えて二重構造で物語が進められている。小説内ではカレンとスコットの旅路と、ブリタのスコットの旅路が同時並行に綴られているが、移動する方向と目的地が全くの真逆である。スコットがカレンの奪還と逃避行について語る中で、特徴的なのが統一教会のリーダーの掛け声である。

Team leader said, Gotta get goin' kids. Pali-pali. (*Mao II* 13)

Team leader said, Gotta hurry hurry hurry. Pali-pali. (*Mao II* 15)

これに対応するかのようにカレンが家族から奪還した際にも繰り返し使われている言葉が次の引用である。

You were brainwashed.

You were programmed.

You have the transfixed gaze. (*Mao II* 79)

Programmed.

Brainwashed.

Indoctrinated. (*Mao II* 80)

統一教会と家族からさながらマントラのごとく繰り返し同じ言葉を浴びているカレンは「洗脳」とそこからの「奪還」と相反するベクトルをそれぞれに体感せざるを得なかった。つまり、それぞれの旅路のベクトルと重ねて考えれば、ビルの住処に到着することは、スコットによって神格化されたビルの思想に没入することを意味し、そこから脱出することはビル思想から奪還していることを意味していると考えられるだろう。確かにビルと暮らし始めたカレンはスコットと同じくビルに身を捧げるように尽くすが、ビルが失踪した後 Karen's life had no center with Bill on the lam. She was all drift and spin. (*Mao II* 142) とビルのいない住処で途方に暮れた様子で描かれていることだ。その一方でビルのポートレートを撮影した後のブリタは、ビルに興味を失っていく様子が描写されている。特にそれが顕著なのは、ブリタが自宅に戻って直後にビルからの電話が鳴って留守番電話のスイッチが入る場面である。ビルの声を留守電話越しに聞くが、彼女は決してその電話を取ることはなかった。ビルの留守番電話の様子は約二ページに渡って綴られていて、また取り留めのない内容をつらつらと語っている様子はかなりの異常さを感じられる。しかしながら、無情にも留守番の録音時間によってビルの語りは強制終了してしまい、またブリタもかけなおす様子もなく彼らの直接的な接触はそれ以後一切描かれることはない。このように彼女たちの位置関係を示す旅路から、「洗脳と奪還」という一つの大きなキーワードが浮かび上がってきた。

3. Bill の脱出

さて、主人公であるビルの移動について着目してみると、旧友からの頼みを聞き入れるために、長年の隠遁生活を捨てニューヨーク郊外にある住处から脱出するところから始まる。まずは旧友に会いにニューヨークへ、そこから娘がいるハーバードに向かいパスポートとトラベラーズチェックを手に入れ、ボストンを経由してイギリスへと入国する。彼の無鉄砲な性格が災いして衣服など身の回りのものは入国直前に購入したのにも関わらず不足が出てしまうだけでなく、常備薬を忘れ、わずかな薬を薄く切ってしのがなくてはいけない危機的状況に陥る。そしてそのまま綱渡りのようにロンドンに滞在し、旧友に滞在先を聞かれてもあやふやな回答を繰り返し自分の居場所を悟られないように努めている様子が描かれている。そうこうしているうちに、テロリストのスポークスマンに居場所を突き止められ、接触を余儀なくされてしまうところから、彼がさらなる移動を決断する場面を見てみよう。このアテネでのスポークスマンとビルの会話では、毛沢東の話になり彼が物書きであるがゆえに毛沢東の信奉者になれると熱弁される場面が次の引用である。

“Bill the sentence-maker. I can see you living there actually, wearing the wide cotton trousers, the cotton shirt, riding the bicycle, living in one small room. You could have been a Maoist, Bill. You would have done it better than I. I’ve read your books carefully and we’ve spent many hours talking and I can easily see you blending written what the culture needed in order to see itself” (*Mao II* 163)

前章でカレンとブリタの真逆の「旅路」と「洗脳と奪還」について考えれば、また、スコットの異常なまでのビル神格化について考慮すると、このスポークスマンの言葉は適切であると言える。だが、しかし神格化され続けたビルはもうこの時すでに隠れ家という聖地から脱して移動をしていることを鑑みるとビルはもはや神格化された存在からかけ離れてしまったことを意味する。要は、隠れ蓑にいて初めてビルは神格化されるが、そこから離れればもはや「個」であることを認めざるを得ない。それを裏付けるようにあらゆる聖人が取り揃えてあるこの地アテネの描写を挟むことは、ビルの脱神格化を自ら認識し、我々読者にも同時に印象付ける描写だと言える。

Bill stood outside a shop that sold religious articles. Many medallion images of sacred figures with shiny disks behind their heads. They’ve got their game together here, he thought. Name many saints, get them in the windows, do not stint on halos, crosses, shields or swords. The priests were damn impressive too. He saw them everywhere, round-hatted and intensely bearded, wrapped in floating robes. Sturdy men every one. Even the elderly were healthy-looking. Bill thought they were deathless in a way, fixed to national memory, great black ships of faith and superstition. (*Mao II* 154, underline mine)

これに加えて同時にビルがこのアテネでテロリストと会うはずだったのがペイルートでの激しい戦闘によって計画が頓挫したことを告げられた時に、ビルは人質の行末を気にしている様子が次の引用である。

“And Jean- Claude?”

“Who is that?”

“That’s the hostage, George.”

“Don’t tell me his name.”

“You know his name.”

“Slipped my mind. Forgotten. Gone forever.” (*Mao II* 170, underline mine)

このように人質の名前を出して気にかけるビルと、名前すら忘れるスポークスマンと会話から読み取れるように、「名前」がよりの確に個人を特定することを考えれば、ビルが「個」をより顕在化したいと願望を覗かせた場面のように考えるのが妥当だろう。また、ビルが心の拠り所としている父親との思い出の言葉である *Measure your head before ordering.* (*Mao II* 170, 201, 216) が、上の引用を境に前触れもなく作中に度々挿入される。このことが意味するのは、ビルが公の存在であることを辞め、私的な「個」の表象としての「思い出」を胸に移動をしたのだと推察できるのだ。その一方でビルがいなくなった隠れ蓑では、スコットがビルの個人情報を漁っており、ビルの本名や出生地などかなり私的な情報を確認しつつも厳重に保管して人目にさらされないようにしている。より神格化を深めようと努力するスコットがいる傍ら、ビル自身は神格化から逃れているという対比も「場所の移動」をして初めて生じたものである。以上のように、移動を通じて神格化から脱神格化された主人公の存在を確認できた。では次の滞在地であるキプロス共和国のラルナカについて考察を深める。

4. 永遠の航海

アテネでスポークスマンと決別したのちに単独でテロリストに会うため、ペイルートへ向かおうとする途中でビルは、キプロス共和国のラルナカへ訪れる。1989年の情勢を考慮するとペイルートへの渡航は難航を極めることが理解できる。作中では、ラルナカの港で、レバノンのジュニーエ行きのフェリーがラルナカへ戻ってきた経緯についてのあらゆる憶測が飛び交っている様子が第十三章の冒頭に描かれている。ビルは自分の置かれている状況について *He didn’t really think he would have ended among the dead, injured or missing. He was already injured and missing.* (*Mao II* 196, underline mine) と考えている。アテネで交通事故に遭い、腹部に痛みを伴い、スコットやカレンらに何も告げずにラルナカまでたどり着いた状況は、確かに「すでに傷を負い、行方不明になった」と言えるが、それは同時に神が感じることでできない身体的苦痛によって脱神格化したことを比喩的に宣言したことになる。続けて、*Shot by someone. Not a thief or deer hunter or highway sniper*

but some dedicated reader. (*Mao II* 196) という恐怖にさいなまれていた、が、ついに脱したのだと確信する。しかしながら、人間であるがゆえに交通事故によって負った傷は徐々に苦痛という形で彼を襲い始める。彼自身もこの傷が原因なのか、自分がどのくらい危機的状況なのか知りたいがために居合わせた獣医にフィクションの登場人物の症状として診断を仰ぎ、自身が重篤であることを理解する一方で、そういった状況であってもビルはテロリストに捕らえられた人質を思い、彼の物語を紡ごうと試行錯誤している。この今まで隠れ蓑にいた時のビルの執筆について、スコット曰くビルは現在の作品に二十年を費やし、そして書いては書き直しの作業を三年続けている。次の引用はスコットがその様子を語っているところだ。"He rewrites it, then puts it aside. He starts something new, then comes back to it. He takes a trip, he returns, he resumes work, goes away, comes back, works every single day for three years, he puts it aside, picks it up, smells it, weight it, rewrites it, puts it aside, starts something new, goes away, come back." (*Mao II* 51) と断言している。ということはつまり、書くことが移動すること、旅をすることと同義だというなら、ラルナカでビルが書く人質の物語は「書くことによってのみ、孤独と痛みは吸収される。書いた言葉さえあれば、自分が何者かわかるものを」(*Mao II* 204) と自分の言葉によって自分の存在を回収、断定しようとしていることが明確である。ここでもやはりスコットやカレンなど、ひいてはスポークスマンやテロリストなど世間に自分を回収させまいと宣言していることと同義である。しかしながら、ビルの運命は残酷にもジュニーエへ向かうフェリーの運航が再開し、乗船した船の中で絶命という形で小説からの退出を余儀なくされる。ジュニーエに到着した船内で清掃員がビルの遺体を見つけ、彼の名前と番号の入った身分証明書を失敬し彼の物語が幕を下ろすが、今際の際で書き連ねるビルの物語は、決して世に出ることなく、そして彼の望んだとおり、身分不詳の遺体となって永久に小説家ビル・グレイとして回収されることはない。

5. 21 世紀への旅支度

以上のように、移動を通してビルの脱神格化、そして個人への変遷をたどることができた。*Mao II* の最後は、バイルートで写真家ブリタがテロリストの写真を撮影したあと、思いがけず遭遇した結婚式の様子を写真に収めて締めくくられている。合同結婚式で物語が始まり、バイルートでの極めて個人的で私的な結婚式の様子で締めくくり、そしてそれを写真という一つの媒体で結び付けたこの作品は、ヤンキースタジアムからバイルートまで約 9,000 キロの距離を移動しながら一瞬にして切り取る作品である。これは二十一世紀にメディアが被写体として焦点を当てているものが、歴史の一瞬ではなく個人へと変化していく様に類似している。その証拠に二十一世紀が始まってすぐの 9.11 世界同時多発テロで溢れかえったのは、あの時自分はどこにいて、何をしていたかという個人的な真実の物語ばかりだとしたら、ビルを中心とした *Mao II* もどこにいて自分が何者であるかを自らで断定づけるという物語として考えられるのではないだろうか。このようにビルの移動には二十一世紀に向けて物書きがメディアとして資本主義社会で回収される存在であることを否定し、「個」として向き合う様を示した旅路だったと言えるだろう。現在において消費尽くされたコ

ンテンツを飽きられたものとしてとらえ、流行おくれや時代に合わないものを煽り文句として「オワコン」という言葉でひとくりにされる一方で、この言葉自体も使用頻度が落ちこれこそが「オワコン」になったと言われている。このようなアイロニカルな状況でさえもコンテンツそのものは消費からかけ離れ、それ自体が独自の歩みを進めていることが二十世紀からの脱却の一つと言える。我々が *Mao II* の移動から考えるのは、このようなメディアの定義は一時的なものであり本来の定義者はメディアではなく「個」にゆだねられているという事実を示しているのだ。

【参考文献】

Boxall, Peter. *Don DeLillo: The Possibility of Fiction*. London: Routledge, 2006.

Cowart, David. *Don DeLillo: The Physics of Language*. Athens, GA: U of Georgia P, 2002.

DeLillo, Don. *Mao II*. New York: Viking, 1991.

_____. *Underworld*. New York: Scribner, 1997.

DePietro, Thomas, ed. *Conversations with Don DeLillo*. Jackson: UP of Mississippi, 2005.

Dewey, Joseph. *Beyond Grief and Nothing: A Reading of Don DeLillo*. Columbia: UP of South Carolina, 2006.

Lewin, Katherine Da Cunha, and Kiron Ward. *Don DeLillo: Contemporary Critical Perspectives*. Bloomsbury Publishing, 2019.

Osteen, Mark. *American Magic and Dread: Don DeLillo's Dialogue with Culture*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2000.

Veggian, Henry. *Understanding Don DeLillo*. Columbia: U of South Carolina P, 2015.

巽孝之『アメリカ文学史：駆動する物語の時空間』東京：慶應義塾大学出版会、2003年。

渡邊克昭『マオ II』東京：本の友社、2000年。

渡邊克昭『楽園に死す アメリカ的想像力と〈死〉のアボリア』大阪：大阪大学出版会、2016年。

Tempest, Kae. "Conversation with Kae Tempest at the PanMacmillan." Pan Macmillan. <https://www.panmacmillan.com/blogs/literary/don-delillo-and-kate-tempest-in-conversation> (2023年11月29日 閲覧)

Abstract

This paper discusses the novel *Mao II* by American author Don DeLillo, focusing on the theme of movement and the character development within the story. The narrative explores the use of avant-garde techniques, such as incorporating real-world events like the Unification Church mass wedding, the fall of the Berlin Wall, Tiananmen Square, and the Lebanese conflict into the novel. The inclusion of black and white photographs with altered captions is emphasized as a method of intentional media manipulation. The narrative begins at Yankee Stadium, using a photo of a Unification Church mass wedding, intentionally creating dissonance between American cultural symbols and foreign religious ceremonies. The manipulation of images and captions emphasizes the fragility of media credibility and our susceptibility to manipulation. In the second chapter, the movement and “brainwashing and reclamation” aspects are explored through the contrasting journeys of Karen and Brita. The repetition of phrases like in “brainwashing and reclamation” signifies a shift in the narrative, explaining Karen’s immersion in and subsequent rejection of Bill’s ideology. The article suggests that Scott’s intense idolization of Bill contributes to Bill’s deification and, ultimately, his departure from this state. In the third, the passage delves into Bill’s escape from seclusion, focusing on his journey to various locations, such as New York, Harvard, and eventually London. His decision to escape is seen as a departure from being a public figure to an individual. The narrative underscores the idea that writing and moving are synonymous in Bill’s world, culminating in his demise as he attempts to capture the essence of being an individual in his storytelling. In the fourth chapter, Bill’s journey to Larnaca in Cyprus is examined as a crucial point in his transformation. His injuries from a car accident also symbolize his departure from deification. Despite his physical pain, Bill attempts to capture the story of the kidnapped hostages, demonstrating his commitment to storytelling even in the face of his own mortality. In conclusion, the passage concludes by highlighting the cyclical nature of the narrative, from a mass wedding to an intimate ceremony, connected through the medium of photography. It suggests a shift in media focus from historical moments to individual stories, mirroring the current media landscape’s emphasis on personal narratives.